

花柳壽楽師を偲んで

日本舞踊界に多大なる足跡を残されました花柳壽楽師が1月に逝去されました。師の生前のお姿を偲び、その業績を改めて回想いたしますと様々なことが脳裏に浮かんでまいります。なかでも財団法人日本舞踊振興財団における事業では壽楽師には非常にご尽力を賜りました。そのあたりを中心に壽楽師の思い出を記していきます。

【西川扇藏 理事長談】

平成2年に設立された財団法人日本舞踊振興財団は、いくつかの趣意を掲げ活動を開始しました。なかでも日本舞踊の国際化は大きな使命として捉えていました。日本舞踊に先行する日本の伝統芸術は能・狂言、文楽、歌舞伎がありますが、それぞれ相応に国際的な活動はなされていきました。少なくとも先進国ではそれがどのような芸術であるかという認知度は

充分にありました。日本舞踊が外国で市民権を得るためには、本物の日本舞踊を披露することが望まれていたのです。今まで外国で本格的な日本舞踊公演は実施されていませんでしたので、私どもはその実現に向けて歩み始めました。

外務省、文化庁、国際交流基金等の諸官庁、諸団体や企業等の協力を仰ぎ「日本舞踊米国公演」が行われたのは平成6年3月、ロサンゼルスとホノルルの2都市でした。総勢50名余りに及ぶ公演団員のトップには花柳壽楽師をお願いしました。芸術監督として壽楽師には舞台はもとより、現地の領事館をはじめとして関係各所を私とともに回っていただきました。アロハシャツが正装であるホノルル



ドイツ・ワイマール市内で、花柳壽楽師と西川理事長

でも壽楽師と私は紋付、袴の日本の正装で訪問いたしました。壽楽師は相当お疲れになったことと思いますが、そんなことは微塵も感じさせずに、日本舞踊を広く知らせしめることに熱意を持って対応してくださいました。

舞台は常磐津「京人形」の甚五郎を務めていただきました。日本舞踊のそれも古典の演目は数多ありますが、どうしても時代背景や日本独自の文化を抜きにしてはわかりにくい演目が多いので、外国人に理解していただけるだろうか、楽しく鑑賞してくれるのだろうか、と熟慮しながら演目設定をいたしました。お相手は藤間蘭景師で、お二人のこの演目の共演は初めてのことでした。



【京人形】

ロサンゼルスで初日の開幕を迎え、私はひとり2階席の後方で舞台を見守りました。団長として自身は舞台に立たない私は、祈るような気持ちで米国人の観客のなかに入って舞台を見守ったのです。序幕の若手の新しい演目「扇景」に続いていよいよ「京人形」が始まりますと、それまでざわざわしていた客席はしんと静まり返りました。さすがにマナーはすばらしい等と感心しながら彼らとともに舞台を見入りました。常磐津の置浄瑠璃に続いて壽楽師が正面の暖簾奥から姿を現したとたん、万雷の拍手が場内に響き渡ったのです。これにはいささか驚きましたが、それだけ壽楽師に対する期待感の大きさであることを実感したのです。その後舞台は進み、コミカルな所作に対しては大きな声で笑ってくれて、一方踊り地の後等一通りの所作が済むとそのたびに身を乗り出して拍手です。この反応の良さ、実に舞台と客席が一体感を創り上げてくれました。「京人形」の幕が閉まった後もしばらくは拍手が止みませんでした。

終幕は高濱流光妙師と尾上菊之丞師、それに男性陣による創作舞踊「鳴神」でした。

「鳴神」の舞台が終わると日本では味わえないカーテンコールです。幕が上がりますと拍手は一段と大きくなりました。

全出演者が順に舞台に再登場し、しんがりに壽楽師が甚五郎の扮装のままで舞台中央に向かいます、今度はスタンディングオベーションです。私も椅子から立ち上がり舞台の皆に拍手を送りました。

初日の成功に我々は安堵いたしました。壽楽師の素晴らしい舞台によって、本物の日本舞踊は国境を越えて鑑賞されるということを確認したのです。ホノルル公演でも同様な成功を得て、私は気が早いとは思いながら帰国便の機内で次なる公演は壽楽師にどのような舞台をお願いしようかと模索していました。

丸3年後に2回目の米国公演を実施した財団は、壽楽師主演で創作舞踊「日本舞踊－俊寛」を取り上げました。

（「日本舞踊－俊寛」を上演するに当たり、織田紘二氏が演出に携わる）

【織田紘二氏談】

私は歌舞伎の演出や制作が専門なので、財団法人日本舞踊振興財団から創作舞踊の演出を依頼されたときは戸惑いました。しかも花柳壽楽師主演で俊寛を



素踊りで上演したいというのですから、それに会場は日本国内には非ゼロサンゼルスとシアトル。ともあれ企画意図を伺い取り組むことにいたしました。一番驚いたことは主演の壽楽師が振付師の指示に実に忠実に従うということでした。これは当たり前のことなのでしょうが、歌舞伎の役者さんと振付師との関係とは異なっているようです。歌舞伎の場合は振付師が演者の癖を掴んで、覚えやすいように踊りやすいように創ります。その癖を上手く取り入れると観客も喜びますから一層効果があるのでしょうか。むしろ日本舞踊の振付の場合もこのようなことはあるのでしょうか、振りの創り方、或いは渡し方というのでしょうか、踊る方と振付する方との関係が高度なような気がいたしました。

「日本舞踊－俊寛」の振付は橋芳慧師が担当されましたが、きめの細かい振りが随所に散りばめられていらっしやいました。受け手の花柳壽楽師はそれを懸命に表現なさっていました。それが私には大変新鮮に見えました。私の役目は演出ですから、振りが渡されて何度も稽古を重ねている折に、気になったことを述べるのですが、そのときも大方壽楽師は従って下さいました。しかしあくまで大方であって、自身納得がいかないところは演出面に限らず振付や作曲に至るまでご意見を仰います。そのようなときには師とじっくりと議論をいたしますが、師の言葉のはしはしから実に多識な方であるということを確認いたしました。歌舞伎や能はもとより映画や演劇、オペラ、更には文学や写真に至るまで造詣が深いのです。聞き伝えますが何でも晩年にはインターネットにも興味を持たれたようで、最後まで好奇心の旺盛なところがあったようです。



【日本舞踊－俊寛】

（「日本舞踊－俊寛」の作曲は本條秀太郎氏に依頼した。）

【本條秀太郎氏談】

日本舞踊でこのような創作舞踊の作品を手がけたことはありませんでした。し



かし台本を読ませていただきながら、俊寛像と壽楽師が重なってきまして段々にイメージが膨らんでいきました。財団とのお約束の期日に間に合わなくて、細切れにテープを順にお渡ししたことは今でも

申し訳なかった思っております。しかし自分で言うのもおこがましいのですが、この曲を創っていくうちにどんどんと出来栄が良くなっていくのです。作曲しながら壽楽師の舞台姿が浮かんできたくらいです。

漸く全体ができ上がって仮録音しました。スケールの大きい厚みのある音楽にしたかったので、いろいろな楽器編成を組みました。結構時間がかかって終了してスタジオを出たときには夜が白々と明けていました。舞踊家やスタッフの皆さんに聴いていただいて舞台創りに入ったわけですが、壽楽師からは一箇所作曲し直すように言われました。私としては割合気に入っている所だったのですが、仰せに従い書き直しました。壽楽師の仰ることは私にも理解できたのです。まだ振りもついていない状況ですが俊寛役の壽楽師にとっては重要なシーンだったので、やはり最初の音では動きにくく舞踊になりにくいと直感されたのでしょう。しかし私も自信を持って創ったものですから、少々細工をいたしまして作り変えました。そうしたら壽楽師は大変気に入った様子でしたので私も安心いたしました。

【西川扇藏理事長談】

「日本舞踊－俊寛」は米国での公演の後、東京で凱旋公演を行い、しばらくしてドイツでの公演が実現しました。時に壽楽師82歳、まだまだお元気でした。翌年には音楽を担っていただいた本條秀太郎氏の生まれ故郷潮来で再演し、最後にNHKのスタジオにて収録され全国の皆様にご覧いただいたのです。

東京では国立大劇場の上演でしたが、
壽楽師は皇室の方々にもご高覧いただき
たかったようで、もちろん実現すれば日
本舞踊界にとってもすばらしいことでし
たが、あいにく日程調整が叶わなかった
ようです。皇室で思い出されるのは平成
4年の文化庁芸術祭祝典における日本舞
踊公演です。壽楽師の他にはやはり故人
となられた吉村雄輝師、それに私が出演
させていただきましたが、当日は物々し
い警備のなかで皇太子殿下、紀宮殿下
(現黒田清子様)、三笠宮殿下、同妃殿下
がお越しになられて鑑賞をされました。
終演後には特別室にてわれわれ3名の日
本舞踊家と大変身のある歓談をさせてい
ただきました。とりわけ当時の紀宮殿下
はご本人も日本舞踊をお稽古されていた
こともあり熱心にお話されていたお姿を
思い出します。

(紀宮殿下に日本舞踊を指導されたのは
壽楽師門弟の花柳錦勇氏である)

【花柳錦勇氏談】

私の師匠である花柳
壽楽先生から、学習院
の中等科と高等科で日
本舞踊のクラブ活動が
できたから指導に行く
ように、と言われたの
は昭和29年だったと思いいます。先生の
ご長男(故先代花柳錦之輔師)が学習院に
通われていた関係で、学校側とPTAの
皆さんとで決められたのでしょう。先生
が行かれてもよかったのですが、
おそらく女生徒が多いことを予測されて
私を指名されたのだと思っております。

後年紀宮殿下が入部され大変熱心にお
稽古に臨まれました。殿下の日本舞踊に
打ち込まれるお姿、その集中力は素晴ら
しいものがありました。あるとき皇后陛
下からお伺いしたのは、殿下のお部屋か
ら就寝時間が過ぎているのにもかかわら
ず物音が聞こえてきたそうです。どうや
ら日本舞踊の稽古をしていらしたそうで、
陛下も大変微笑ましそうな表情でお話を

されていました。

私が主催する舞踊会に殿下が出演され
たいと伺った時、何より壽楽先生が喜ば
れました。リハーサルの時には大勢の警
備の方々に守られながら青山の先生のお
稽古場にお越しいただきました。先生は
嬉しそうに殿下の踊られている風景をご
覧になっていらっしゃいました。本番の
舞台が済んだ後、先生が心から私を労っ
てくださったことで、私は心底ホッとし
た次第です。

【西川扇藏理事長談】

花柳壽楽師は日本舞踊の現状と行く末
を大層気にかけていらっしゃいました。
ご自身は舞台に立つ事ができなくなって
しまった最晩年、(社)日本舞踊協会の創
作舞踊劇場に対しての熱意は、今年の公
演でも劇場に足を運ばれ関係各位にご指
示を出していらっしゃいましたし、国立
劇場の変化物舞踊の会の記者会見ではプ
レス関係者に熱弁を揮われていらっしゃ
いました。

残された我々日本舞踊界に携わる面々
は、花柳壽楽師のご意志を踏まえ斯界の
発展のために、一丸となって立ち向かっ
ていかなければならないと改めて思いま
す。花柳壽楽師のご冥福を心よりお祈り
申し上げます。 合掌。



花柳壽楽氏 プロフィール

1918東京に生れる、1932義兄二世花柳壽
輔(後の花柳壽應)に入門、1939花柳錦之
輔を名乗る、1965初代花柳壽輔の俳名を
継ぎ、二代目花柳壽楽となる、1952文部
省芸術祭奨励賞受賞、以後同賞計5度受
賞、1958舞踊ペンクラブ賞受賞、以後同
賞計2度受賞、1963文部省芸術選奨文部
大臣賞受賞、1964東京新聞舞踊芸術賞受
賞、1973紫綬褒章受章、1983花柳壽慶賞
受賞、1988日本芸術院賞受賞、1988勲四
等旭日小授賞受章、1991松尾芸能賞特
別賞受賞、1992重要無形文化財保持者
(人間国宝)認定、2003日本芸術院会員、
2005旭日中授賞受章、平成19年(2007)1
月7日ご逝去。